

A 

B 

C 

D 

E 

洛北高校でのインターンシップの記録。
ポートフォリオのA~Eのそれぞれの力に
応じ、それぞれの色の線をひいた。
理論と実践のつながりを考えた。

教員養成サポートセミナー

(京都府との連携によるインターンシップ)

この力。

6. 研修日誌(前半)(研修第1週)(2012年10月4日)(氏名: 三森 彩乃)

* 研修課題に応じて、「研修の記録」の書式を適宜作成して用いてもよい。

時間	教科など	学年・組	生徒の活動内容	研修生の活動	場所	担当教職員
SHR						
1						
2						
3						
4						
昼食・休憩		食堂		昼食		
5	国語総合	104	授業 徒然草	見学	104	
6	現代文	305	授業 新編	見学	305	
SHR・清掃活動		104	SHR 清掃・自由時間	清掃 生徒と会話	104	
7	国語総合	102	授業 近代論 評論	見学・インタビュー	102	
放課後(部活動等)						

●振り返り●

3年振りの高校での授業が懐かし。また、生徒とは違う立場で授業を見るのがとても面白かった。今日は、教室の後ろで座っているのではなく、横に入ったリして、生徒の様子を観察することを意識した。強く感じたのは、1対40の形式で、充実した授業をやることの難しさである。疑問があっても、当たられた生徒以外の生徒に自分のこととして考えさせるのは難しい。また、先生の方も、授業を進行させながら、生徒(一人一人)の理解はなかなか探れない。大学ではよく「相互通行」の授業と、というふうな話を耳にするが、本当に可能なのか、とさ上思った。大勢の授業と、個の力を伸ばすことを効果的につなげるにはどうしたらいいのか…。さらに、「先生として授業を担う」ことを意識し始めていたことも分かった。良い授業には生徒の意欲なども必要で、先生だけが作るものではないことに改めて気づかされた。教室ごとに違ったカラーがあり、先生はそれに合わせてどう授業を変えているのかも気になった。7限の授業では、教科書ではない教材を用いて、かなり高度な近代論の導入を取っていたが、先生の話の引き出しが豊富で、私も聞かされてしまった。生徒も「聞いてよく分からない」という声もあったが、興味深そうに聞いていた。こんな授業ができるようになりたいと思うと同時に、教材の選び方や授業観・国語観について先生方に伺ってみたいと思った。

●指導教員評●

初めて授業を見学しいろいろなることを経験したと思います。今後はもっと視野を広げていろいろなる角度から物事を見つめればまた違ったものが見えてくると思います。

●大学担当教員評●

授業は先生と生徒がともに創っている、という気づきはとても重要なと思います。「一斉授業」と一くりにされそうな授業の中でも、生徒一人一人の理解や生徒同士の関係性への先生方の配慮があり、静かに聴いている生徒の内面では思考が起きている、こういった見えていない部分についても、見える事実から想像力を働かせてみましょう。

10. 研修日誌(後半)(研修第7週)(2012年11月15日)(氏名: 三森 彩乃)

* 研修課題に応じて、「研修の記録」の書式を適宜作成して用いてもよい。

時間	教科など	学年・組	生徒の活動内容	研修生の活動	場所	担当教職員
SHR						
1						
2						
3						
4						
昼食・休憩						
5	日本史	2年一貫	授業 華文大	見学・インビュー	201	
6	教科科 等場	/	/	試験問題 ファイリング	職員室	
SHR・ 清掃活動						
7	国語	/	/	校内を回って 様子を見学	廊下など	
放課後(部活動等)						

●振り返り●

今日は初めて日本史の授業を見学した。自分が高校時代に使っていた教科書とノートを参考し、当時の授業と比較しながら見学した。今日は一貫の授業だったが、Ⅱ類やⅢ類のときには、受験を意識するより、日本人として知っておくべきことを重視して授業をされているということだった。そこから、ある歴史上の事柄に関して調べ学習・発表などを行っているようだ。また、国語科の先生にも、前に訪ねていらした、学力は高い学校での指導の話を伺った。その学校では、珍しく、1年生の国語表現を必修にし、読むより書くことを重視している、ということだった。毎時間新聞記事を題材に、1分間スピーチをさせ、他の生徒には聞き書きをさせるということだった。最終的には、京大などの場面で話をすることができるように、というのを目指している国語科の事例がほつりしている、時間があるので、高瀬舟をやった際に社会科とリンクさせて模擬裁判をしたりなど、柔軟に活動できる、という話が興味深かった。2人のお話から、いわゆる進学校が10年に受験の影響を受けているか、本来の授業の華とは、など、考えさせられた。「国語の授業というものは、さわがれたいとダメだ」の考えも印象的だった。6限にも貴重な体験をさせていたにいた。改めて教師の仕事の幅の広さを感じるとともに、反省会のお話からも、教師団というチームで仕事をすることについて考えた。職員室の雰囲気も肌で感じ、「仕事」としての教師の面を少しはあみだ

●指導教員評●

回数を重ねる度に視野が広がっていているのがわかります。6限の作業の興味も理解してもらったのではないでしょうが、単純でおもしろくない仕事にも必ず興味があるということがわかればよりクリエイティブな仕事になっていくのではないでしょうが。

●大学担当教員評●

知ることができたと思う。

三森さんが毎回新しい工夫を行って視野を広げていっている様子が伝わってきます。日誌に書いてくれている先生方の事例はいずれも興味深く、三森さん自身が、語られた事例をサポートセミナーでの経験をもとに具体的にイメージできていることがわかります。教師の仕事については、先生方一人ひとりの実践・研究の自由や自律性が尊重される必要があると同時に、学校という組織でチームとして生徒の成長に責任を持つ部分も重要です。そうした自律性と共同性の関係も視野に入れながら、教師の仕事について考えてみてください。